

## 蘇我氏の復活

故佐宗邦皇氏による月刊『ムー』9月号「蘇我王朝の復活」は興味深かった。

氏は、日本の歴史は、**645年の大化改新から1945年の敗戦まで**、ちょうど1300年間、**藤原氏の支配を受けていた**という。以下まとめる。

**記紀は、藤原氏によって意図的に歪められており、正しく史実を伝えていない。**

佐宗氏の先祖である蘇我氏は、古墳時代から飛鳥時代（6-7世紀）にかけて一大勢力を誇った氏族で、代々大臣を出す大和の有力氏族であった。

朝鮮半島からやってきた百済王朝の重臣・木満致を祖とし、大陸の知識と技術をベースに経済的基盤を固め、権力の中枢の座を占めるようになった、と歴史学では定説になっているが、これは事実ではない。

蘇我氏＝百済系渡来人説は、蘇我氏宗家を滅ぼした中臣鎌足とその末裔である藤原氏が、蘇我氏を貶める意図で広めた説である。

蘇我氏は、聖徳太子と深いかわりがあり、互いに親戚であった。

大陸と新たな交流を開始しようとし、親百済の政策を打ち切り、新羅や高句麗と接近した。

この政策に反対したのが、**中臣鎌足**であった。佐宗氏の推測によると、彼は、**百済の王義慈の王子余豊璋**であった。

**鎌足は、中大兄皇子と組んで蘇我氏の支配を打倒し、百済との連合強化、軍事的協力体制の構築を目指した。**

**これが大化の改新の本質**である。つまり、**外国勢力を背景としたクーデター**。今日のCIAによる親米政権樹立クーデターに似ている。

日本は、その後、**1945年の敗戦にいたるまで**、影響の大きさに変化はあったが、また、壬申の乱後天武系天皇による支配回復があったが、**基本的に大陸系藤原氏の支配を受けることになる。**

敗れた佐宗氏の先祖蘇我氏のグループは、東に向かい、**相模国に移り住んだ**。備後の稲葉氏の家臣となり、小田原を拠点として活動した。

**徳川時代、幕府は公家と天皇家から権力を剥奪し、生かさず殺さずの状態に追いやった**。藤原氏も同様であった。（佐宗氏は、この背後には蘇我氏の働きかけがあったのではないかと類推する。）

**明治維新とともに藤原氏は復活**した。公爵の位を与えられ、権威を徐々に回復していった。

昭和になり、**藤原氏の本家の直系である近衛文麿が総理大臣になった**。彼のもとで**日本は破滅へ**といたる道**を歩んでいった**。

**敗戦によって、日本は1300年続いた藤原氏の支配という重いくびきから解放された**のではないだろうか。

興味深い論考である。

私は、**蘇我**という姓に注目する。「我を蘇らせる」。

キリスト教徒であった秦氏、聖徳太子の一族との姻戚関係があったというから、おそらくキリストを意識してつけられた姓だろう。蘇我氏が新羅を重んじたというのは、秦氏が新羅出身だからという事情があるからなのかもしれない。

蘇我氏が、クリスチャンであったとしたら、それを迫害した勢力である藤原氏は、反キリストということになる。

しかし、どうもそんなに簡単には割り切れない。**藤原氏の出自が百済王**にあるということは、**百済の王族は夫余であり、夫余はイスラエルと関係**があるとされているから、つじつまが合わない。

中臣鎌足（余豊璋）の父とされる百済義慈王の曾孫女は、夫余太妃という。最近、その墓地が中国で発見された。

[http://contents.innolife.net/news/list.php?ac\\_id=13&ai\\_id=91650](http://contents.innolife.net/news/list.php?ac_id=13&ai_id=91650)

『三国史記』高句麗本紀・東明聖王紀に出てくる**夫余族の名前はセム系**である。解夫婁＝ヘブル、阿蘭弗＝アラブ、解慕漱＝ヘモス、鯤淵＝コンエン＝コーエン。

<http://www.millnm.net/qanda3/59SAOtFBA66688379.htm>

天皇家も夫余であるから、藤原氏と天皇家は同族であり、夫余系ユダヤということになる。

だから、日本における2大勢力の対立というものは、キリスト対反キリストという単純な図式では表すことができない。

**蘇我・秦＝新羅系ユダヤ**     **対**     **藤原・天皇＝百済・夫余系ユダヤ**

とまとめられるのだろうか。

**日本の歴史を構成してきた2大勢力は、ユダヤとユダヤの対立であり、いずれのユダヤが表に出るかという問題**なのか。

佐宗氏の論文を図にまとめましたので、ご参照ください。

<http://www.millnm.net/qanda3/soga.gif>

2009年9月16日

([ミレニアム](#)より)